

## おかしいぞ、時代考証

橋口 侯之介（誠心堂書店）

### ドラマに出てくる本の風景

時代考証というのは難しいもので、作家や映画・ドラマを担当する美術部泣かせのところがある。与力や同心はこうでなくてはならないとか、江戸時代の髪型はこうだった、といった知識は最近の「江戸ブーム」で詳しい人が多くなってきたから、やりにくいだろうと想像する。

そういう意味で、演出家や美術係ばかり責めるのも何だと思っただけだが、本屋の癖が出てテレビドラマなどで本のある風景があると、つい意地悪な目で見てしまう。

現代のドラマでも、作家の書齋が見えると「ああ、安い本ばかり集めてそれらしく作ったただけだな」とわかってしまう。ある女流作家の書齋が、話では昭和四十年代からの回想形式だったが、セットではずつと同じだった。誰でも経験すると思うが、減らしているつもりでも本は増えていく一方である。そのため、書齋にはいつも必要とする本を優先して身の回りに置いていく。つまり、ただ積まれていくのではなく生きていくのだ。少なくとも当人はそう考えて本を「整理」する。その機微が全然わかっていなか

った。戦前の平凡社版美術全集、昭和三、四十年代の文学大系、百科事典、それらしい文学研究書などが並んでいたままだった。私たち古本屋が「つぶし」といつている二束三文の本ばかりだ。予算がなかったのか、そういうところまで気が回らなかったのか、モデルになった作家がかわいそうだと思うたものだ。

本が雑然と積まれた光景がよく出てくるのだが、そういう時に本の下小口側を見せて積んでしまつては意味がない。いくら置き場所がなくても本は背中が見えるように積むものである。そうすれば、どこにどの本があるか、記憶の中に留めておくことができ、必要な時にすぐ取り出せるのだ。せめてそういう気遣いをして欲しい。

現代でもそうなのだから、時代劇の映画やテレビドラマとなると、もつと首をかしげるようなことがある。

新撰組を題材にしたドラマの場面で布製のボール紙を使った紺色の映入の本が見えたが、これは江戸時代にはまずないものだ。明治大正期の『国訳漢文大成』か『国訳大蔵経』の和装本で、美術部の人がかわいらしいと思つて置いたのかもしれないが、古本屋にはすぐばれる。

かつて徳川吉宗が主人公のドラマで將軍の手にしていた和本が、下本といつてふつうの人が読むものだった。これには愕然とした。幕府の図書館・紅葉山文庫には、代々の將軍に献上された本が納められているが、献上本とは「謹直な清書本または鮮麗な初刷り本である。体裁は善美を尽した特製本である。料紙は寛闊、装訂は絹布の表紙で、さらに帙を加え、桐箱に

収めてある」（福井保『紅葉山文庫』）というもので、いくら質素を旨とすべしという將軍でも、下々の本といっしょにしてはかわいそうだ。

昨年話題になった篤姫が本好きで、とくに『日本外史』を好んだそうだが、それを読むシーンでも品のない装訂だったのがいただけでない。画面に出ているのは、頭注のあるいわゆる川越版の『日本外史』に見えた。内緒で市井に出ている本を読んでいたという設定なら仕方ないが、それに無理矢理現代風の表紙をあしらった本にしたからおかしく見えたのだ。もつと江戸期の品格を出してほしかった。いずれも番組には、しっかりした時代考証の先生がついていたのだから、これは美術部門の問題なのだろう。

寺子屋風景で、今の小学校の教室のように壁に生徒の書いた作品をたくさん貼っていたドラマの画面があった。和本の挿絵をいろいろあたってきしたが、そういう絵柄を見たことがない。ふつうは貴重な紙に何度も何度も書き重ねていく。真っ黒になるまでするのである。作品の発表会があつて父兄にでも見せるつもりだろうか。現代の学校と混同している。

演出に問題があることもあつた。義経のドラマで、牛若が文字の勉強をするときに大量の紙を使って書き散らしていたシーンがあつた。これはありえないことだ。紙は貴重品だった。朝廷の繪旨ですら漉き返しの宿紙すくしを用いていた時代に、鞍馬にこもっている若者が部屋中に紙を撒いて文字を学ぶことなど考えられない。懸命に学んだことを象徴的に見せようとしたのだろうが、私には違和感を覚えた。これも一枚の紙が真っ黒になるまで何度も書いた、という演出にすぎなかったのだ。

山本勘介が万巻の書物に囲まれて学んでいる画面があつたが、これもやりすぎである。戦国時代は、まだ書物があまり普及していなかった。書齋というほどの一室はほとんどなかったと想像できる。ただ、当時駿河・今川氏のところには冷泉家などの公卿が食客となっていた。これは応仁の乱以降疲弊してしまつた京を逃れてきた人たちだ。典籍類もいっしょに疎開していたそうである。勘介がそこで学んだということならありえなくもないが、冷泉家と『孫子』や『六韜三略』ではミスマッチな気がする。山本勘介の実在はずっと疑問視されていたが、最近になって存在そのものは証明されてきたそうだ。それでも彼を武田信玄の軍師とするのにはまだまだの歴史家が疑問をもっている。ドラマで勘介が軍師として実力をつけたといいたいなら、具体的な師匠なり蔵書のありかを先ず示すべきだった。

たしかに戦の続く時代は、あまり本は普及していなかったが、それでも西の大内氏、島津氏あたりは出版も行っているし、文運に秀でた武将もいた。二〇〇九年のNHK大河ドラマの主人公である直江兼続はまさにそういう人物だった。慶長十二年（一六〇七）木活字を使って『（六臣注）文選』六十巻を翻刻させている。いわゆる直江版として珍重されるものだ。ドラマで、そのような文人武将と本の関係がどう表現されるか楽しみにしている。戦国時代、万巻の書物が蔵されているという光景は無理としても、案外、兵法書や『文選』はよく武将に読まれていたらしい。だから、あまり殺風景にしないで、ちよつと本がある風景を演出してほしいものである。

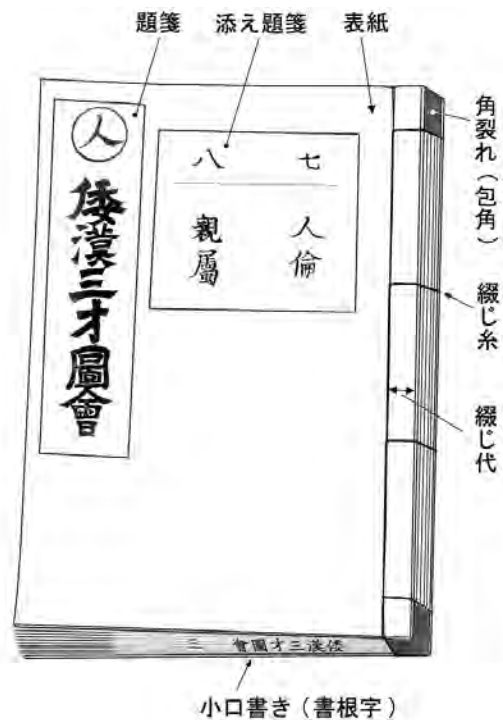
## 真っ白な紙はだめ

一般的に時代劇で気になるのは、紙が白すぎることだ。本にかぎらず書状や帳面にしてもそうだ。現在の文房具店などでは、化学的な漂白剤をたっぷり使った真っ白な「和紙」を売っているが、そのような機械的につくった紙は、昔は当然なかった。手紙に使う奉書紙は上等な新品でもやや黄味がかっており、上質の鳥の子紙にいたっては鶏卵色をしていたのでその名がついたくらいだ。塵紙は灰色である。

わたしの店でもたびたび映画会社やその制作会社から相談を受けることがある。ある映画で用いるのにふさわしい和紙を選んであげたら、当時はそれが新本なのだからもつと紙が白かったはずだといって、結局、現代の真っ白な和紙で作った和装本まがいを使うことになってしまった。

別の映画では、「魏志倭人伝」を出したいというので、話で設定されていた一九六〇年代に入手可能な『三國志』のことを教えたが、予算がないのか中国の活字翻刻本にしてしまった。それを見ながら漢文知識のない人が「倭人は帯方東南大海の中にあり……」と読み下し文で読んでいたが、それは無理というものである。それなら岩波文庫本でよかったのに。いずれもスタッフの認識不足である。

小道具さんたちが、もし和本や奉行所の調書などを用意するなら、紙は真っ白でない手漉きの和紙（書道具屋で売っている）を選んでほしい。現代でも書籍用紙は「クリーム上質紙」といって、わざとクリーム色にしてある。真っ白だと眼が疲れるからである。漂白技術の不十分な時代、新品

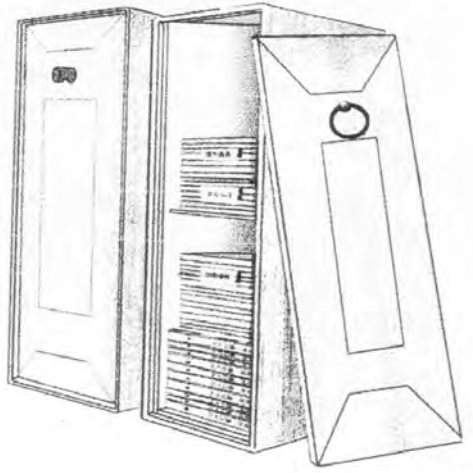


和本の表紙。題箋は幅が一寸(約3cm)から一寸半程度。長さは本全体の三分の二。貼る位置は小口や天から一分(3mm)から一分半。綴じ代も1cmくらい。これをはずすと品が無くなる

の漉いたばかりの和紙でもちょうどこのクリーム上質紙並みである。それなのにテレビで見ると真っ白な紙。この意味を教えてあげたいものだ。

表紙に貼る題箋も大事で、大きさや位置とも決まっているものなので、そうした様式にしたがって作るべきである。和本には品格が必要で、題箋の大きさひとつで、それをぶち壊してしまうから、ぜひ守ってほしい。まして大名クラスが持つ献上本の「善美を尽した特製本」という意味合いを理解してほしいものだ。また、一般人が見る本は無理に帙や套に入れようとしてほしくないで、はだかのままでもよい。よけいなことをするとかえって馬脚をあらわしてしまう。

和本の挿絵を見ると、木箱入りの和本がよく描かれているものである。このケンドン型の箱が当時のよく見られる風景である。時代劇のセットで



ケンドン型の木箱。これを数個部屋に置くと学者の家らしくなる。一、二個でも格好がつく

本をどのように置  
くか苦労するのだ  
ったら、このケン  
ドンを二、三個置  
いておくと江戸時  
代の書齋らしくな  
る。和本を扱う古  
本屋に頼んでおけ  
ば時代のあるもの  
を調達してさしあ  
げる。

寺子屋の子供たちは「変体がな」を覚えた。くずし字で書かれた往来物で学んだから、そこでひと通り読み書きを習得したら、読本や合巻もすぐ読めるようになったはずだ。遊郭の女たちもあんがい本好きで、遊女評判記などの挿絵にはせつせと手紙を書くシーンとくつろいで本を読んでいる風景がよく描かれている。庶民の生活場面で本はふつうの景色として溶けこんでいたのだ。だから滑稽本、黄表紙などを長屋の住人が読んでいたり、貸本屋がたずねてくる風景はもつとあってよいのだ。これをうまく再現してほしい。ただし、元禄時代に黄表紙という言うわけにはいかないから、その時代考証はしっかりと。

本が登場しなすぎるのは時代劇製作者にお願いするより、時代小説作家の皆さんに、もつと作品の中に入れていただくようお願いするべきかもしれない。

出久根達郎『御書物同心日記』はさすがに古本屋出身の作家らしく本の世界を活写しているし、逢坂剛『重蔵始末』シリーズは、書物奉行も務めた近藤正斎が主人公だから和本のことがしばしば登場する。築山桂『禁書売り』は、江戸期の本事情に詳しく、今後が期待できる。豊後佐伯藩がかなりの書物収集をしたことから、それを題材にした佐伯泰英の小説もあった。しかし、大半の時代小説は本に関するかぎり、ちよつと寂しい感じがする。やはり時代劇には、悪代官と悪徳商人がつるんで食い詰め浪人を雇い、彼らと主人公が殺陣をしないとおもしろくないものなのだろうか。

(挿絵は『和本入門』より)

## 和本をもつと時代劇に登場させて

時代考証の揚げ足取りばかりでは能もあるまい。映画や演劇は芸術だから、ただリアティーを求めればいいというものでなく、全体の演出の中で位置づけられるものだろう。そうだったら、むしろ時代劇に本が登場しなすぎることのほうが問題だと思う。

江戸時代後期の読書熱というのは想像以上で、また識字率が思いのほか高かったのだから、人々はもつと本を手近に置いていたはずである。庶民は文字が読めなかったという旧説に惑わされて、画面に入れないようにしているのかもしれないが、もつと草双紙や往来物、重宝記などを入れるとよいのだ。